浮城

— 滋賀県立琵琶湖文化館 —

大津事件関係資料　滋賀県所蔵

企画展示　『大津事件、その後』

会期：平成14年11月19日(火)～12月27日(金)

◀大津の歓迎風景
（再現）

◀津田三蔵

（前略）
問　汝ハ一己ニシテ皇太子殿下ヘ対シ奉リ危害ヲ加ヘタルカ
答　全ク私一人デアリマス
問　汝ハ如何ナル考ヲ以、危害ヲ加ヘタルカ
答　西村警部、誠ニ済マンコトヲ致シマシタ、実ハ御警衛ニ」立チ居リテ俄カニ逆上シマシタ上デス
問　如何ナル事ヲ為シタルカ
答　如何ナル事ヲ為シタルカ、一時眼ガ眩ミマシテ覚ヘマセン
（後略）

明治24年（1891）5月11日午後1時40分ごろ、大津市小唐崎町（現京町二丁目）で重大事件が発生しました。極東のウラジオストックで行なわれるシベリア鉄道の起工式に出席する途中、日本に立ち寄ったロシア皇太子ニコライを警備中の巡査津田三蔵が襲撃した事件です。世に大津事件、または湖南事件として知られています。上記に引用した文は事件発生当日、凶行者津田三蔵に対する取り調べの供述調書（写）の一部で、津田三蔵は計画的なものではなく、突発的な犯行であったと供述しています。三蔵の犯行に対して当時様々な臆測がなされましたが、捜査の結果、背後関係は無さそうで、三蔵の単独犯行として裁判が行なわれ、事件発生後わずか16日で結審し、三蔵は無期徒刑になり北海道釧路の集治監へ送られました。

これで事件は一応片付いたかに思われましたが、問題はそう簡単にはいかなかったのです。事件の10年後（1901）あたりから、ロシア人特にロシア海軍の兵士が度々大津の永井家（事件発生時皇太子が避難した商家）を訪問するようになり、当時の永井家の人々の好意を謝すとともに、永井家に残されていた「血染めのハンカチ」などの「記念品」を閲覧することが多くなっていたのです。なかには「血染めのハンカチ」に口付けをする兵士もいたようです。そして連動するように、「記念品」を含めて永井家を買収しようとする動きもあり、日本政府および滋賀県は神経を尖らせていました。

明治27年（1894）の日清戦争後、極東における諸問題（朝鮮半島の領有権や日本海での漁業権など）において、わが国とロシアが直面する度合いが強くなっていたのです。厳しい状況の中で、わが国政府は永井家宅および「記念品」の買い上げを決定し、当時の金額約12,000円で買収したのです。

そして最終的には家屋および「記念品」が“公”へ収納されたのは、明治44年（1911）であったのです。滋賀県知事から内務大臣にそのことを伝えた報告書には、「右ニテ本件ニ関スル多年ノ係累モ茲ニ全ク解決ヲ告クルニ至リ候」と記され、これは長年にわたる関係者の苦渋と安堵の心情を如実に示す言葉であったと思われます。

現在、サーベルなどの関係資料が滋賀県に保存（滋賀県立琵琶湖文化館保管）されており、資料を調べることで上記の経緯を克明にたどることができます。本展ではこれらの資料を公開し、事件とその後の展開を追うことによって、大津事件とはわが国の近代史にとって何であったかを考えたいと思います。